
明日なき世界

ジャッカル東西田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日なき世界

【Nコード】

N5404Z

【作者名】

ジャツカル東西田

【あらすじ】

2012年12月 「世界崩壊」前夜

寒風吹き荒れる街のなか

赤提灯の灯るモツ鍋屋台には ただ二人のオトコたちだけが居た…

…

第一話（前書き）

自分の世界崩壊願望を書いてみました
多分こんな風にして世界は終わるはず！

よろしくお願いします

第一話

小さな屋台のカウンターに置かれたラジオからは前世紀の「戦争」をテーマにした曲が流れてきていた

時刻はすでに23時を過ぎている

12月の寒風吹きつける中、この様な吹きっ晒しの屋台に寄るのはよほどの「事情」のある者だけであろう

事実多くの者が自宅で家族とくつろぎ、たとえ最後の仕事を終えてから一杯やるにしても暖かいチェーン店の居酒屋などに赴いていた

どこか親しみを感じさせる年季のいつた赤提灯が明るく灯る屋台

店主であろう禿頭の男（つるりとした頭にタオルをねじり巻いている）は

「今日はこれ以上のアガリは見込めない」と考えているのか、カウンターの”内側”で石油ストーブに手を翳しながら呑気に新聞を読んでいる

そして、カウンターの”外側”では果たして「客」なのか否か……

首に【マフラーだけ】を巻いた【全裸】の男が独り。古びた木目にだらりと頬を尽きほとんど空になったコップの酒を横眼で眺めていた

「マスターは……どうして逃げなかつたんだい？」

唐突に、今までうずくまっていたマフラーの男は無気力に酒を眺めることにも飽きたのか顔を上げそう内側の男に尋ねた

マスターと呼ばれた男（タオルを頭に捻じっている）は、新聞に目を通したまま、さして変わった問でもないかのように淡々と応える

「まあ他にやることもありやせんですしね。嫁も娘も離れちまって守るモンも無いですし……地球が終わるったって何も今までやってきた何かが変わる訳じゃあねえんだ。だったらあんだ、いつも通り此処でモツ作ってる方がよっぽど割に合ってますわ」

「奥さんと娘さんはどこに？」

「なに元嫁と娘ですがね。今は嫁の実家の方で世話になっとる筈ですわ」

「……」

男は個人情報プライバシーに深入りしすぎたと感じたのか何も言わず、ただ目の前の安酒を空にした

今日は世界中の人々から、そう呼称よされた特別な一日であった

あるものは祈りを籠めて、あるものは疑惑うたがを以て
人々は『今日』を呼称よんだ

半年前。地球に迫った小惑星群の存在が米国航空宇宙局（NASA）
から発表された時
人々は大した関心を持たなかった

それもそのはず

米国航空宇宙局は毎日のように同じような小惑星を観測し発表して
いたし、過去何度も地球にはその燃えカスー隕石いんせきーが落ちてき
ていたからだ

「今回も逸れるなり外れるなり燃え尽きるなりするだろう」
と人々が気楽に考えたのは当然である

それは惑星群を観測した当事者、米国航空宇宙局でさえそうだった

だが……

三ヶ月前、人々の血相が変わった

「小惑星群はほぼ真っ直ぐに地球に向かって推進している。もしこ
のまま進路を変えることがなければ、大気圏に突入しても燃え尽き
る事なく直径4 kmから10 kmの隕石が地表に降り注ぐことにな
るだろう」

と米国航空宇宙局は発表した

そしてほぼ時を同じくして

イギリス、ドイツ、エジプト、インド、ロシア、英国、独逸、埃及、印度、露西亞、中国、日本
世界中の天文台でその事実が確認された

回避の可能性もほぼ0に近いことさえも……

このNEWSに世界が攪拌された

自分だけは生き残ろうと富裕層は資源を買い漁った
社会に不満を持っていた者は犯罪に走った

宗教指導者は神の教えが唯一の滅びからの救済であると全人類に自
教への改宗（信仰）を迫った

それから戦争が起こった

国家、人種、民族、信教、体制、資源、金銭、権威、遺恨、暴力の
為の戦争

そのなかでも、何より度し難いのは宗教戦争だった

ユダヤ、キリスト、イスラム……

唯一神の宗教は己らの神を賭けて殺し合った

互いの神を殺す為に、より多くの信者を葬った

「世界は唯一神によって造られた。よって唯一神によってこの世界
は終焉を迎えねばならない」

そう宣言し神の名を冠した『核』ミサイルを配備しようとする過激
派も幾つか現れた

米国航空宇宙局（NASA）の発表からひと月経ち、死者が6億人を超えた頃

国際連合が介入した

「このままでは隕石で人類が滅びる前に、人間同士の戦争でなにもかも終わってしまう」

そういつて国連が出した案もまた狂った代物であった……

それは

「隕石が落ちる一週間前に、国際連合が各国に『漏れ無く』核を打ち込むのでそれまでは戦争など止めて仲良くしましょう」というものである

だがこの案の議決後

信じ難いことに、世界は本当に「落ち着いて」しまったのだ

戦争も犯罪も不満も嘘のように影を潜め

ただ静かに【滅び】を待つことに成ったのである

隕石でも天変地異でも戦争でもない

人類自らが選択した【核による滅び】を……

第一話（後書き）

ありがとうございました

拙い文章ですが、まだ続きます

第二話

コトコトと会話を喪った漢たちの代わりに釜の底が煮える音が静寂しじまのように再びその場を治めていた

暫くして…

「マスター、鍋、ひとつ」

言葉を区切るようにして全裸にマフラーだけを巻いた客は肴を頼んだ

「へい！モツ一丁？」

店一杯に響き渡る声。禿頭の店主は威勢のよい声を上げると同時、手は既に流れるようにモツ鍋を作り始めていた

火にかけっぱなしの隣りの大釜から一人用の鍋に牛筋とスープを移し、新たに生の牛モツを投入して火を入れ直す
再び煮たつてから、キャベツ・牛蒡・拉？とを加え強火で数分煮込む
最後にこれでもかとニラを加えて一分足らずで火を止めて完成

この作業を男は11光る頭の男11は26年やって来た
風雨の夜も、雹の降る夜も、W杯の夜も、娘の誕生日の夜も、妻と離婚したその夜も……そして現在（世界の終わる日）ですら

「へい、お待ち」

ゴトリ。と全裸マフラーの前に置かれたモツ鍋にはそれだけの重みがあった

しかし、全裸にはそんなことはわからない。もともと空気を読めない男だ

「はぶッ、ハフッ、あつッ！」

などと独り。ただ美味そうにモツを、ニラを、麺を、鍋を喰らう

その様を見た店主は子どものような屈託のない、それでいてどこか安堵が混ざった人懐こい笑みを浮かべた

モツ鍋はかなり人を選ぶ食べ物である

好きな人は真夏でも欲するが、嫌いな人は一生嫌いなままでいることも多い

そのどちらもがモツ鍋の持つ「濃さ」に起因している

ならば、その「濃さ」をマイルドに（薄めて）しまえばよいというのはかなりの暴論である

作曲家であるこの「濃さ」こそがモツ鍋の本質だからだ

一見……モツ鍋は素材の強すぎる個性が互いを殺し合っているように思えるが、実際はそうではない

その泥臭さ（あく）、淫猥、情熱は何者にも殺害されることなく“味”の中で生き続けている

食材同士が互いの意思を継ぎ、鍋のなかでそれはひとつの越幾斯。

否「意志」へと昇華される

くどい出汁^{スープ}、濃厚^こい野菜、噛^かみきれぬ内臓肉^{モツ}

それらをひとつの個性^{あじ}へと収束させるのが店主の腕の見せ所であった
故に彼は客が嬉しそうに自分のモツを喰べていると思わず微笑んで
しまう

幾ばくかの時が流れた

「お客さんは今日お仕事だったんですかい？」
新聞を読み終えた店主^{マスター}は、目の前の変質者（よく観るとＴＶ局のデ
イレクターのようにマフラーをオサレ結びにしている）
にそう問いかけた

丁度^めの老麵（替玉）を啜^すってた男は、その質問に激しく噎^むせた
まさか世界の終わる日に仕事のことを訊かれるとは思わなかったの
だろう

ディレクター結びは箸を鍋の上に置くと

「言おうか言うまいか」
と気難^{かた}しげに悩^{なや}む中尾彬^{アキラ}のような貌^{かお}を造ったが、すぐにとつとつと
語り始めた

「マスター、俺ね……仕事してないんだ」
恥ずかしそうに、悔いるように、そう全裸は呟いた

「高校出て、地元の工場に就職して半年……仕事辞めて、すぐに自分の部屋に引きこもったんだ」

「……」

「15年……15年だよマスター。15年、同じ部屋に居た。達磨
みたいにさ、何をするわけでもなく。声を上げることもなく他人と
話すこともなくさ……」

「今日は俺の以前働いていた工場を見にいつてきたんだ。そりゃ世
界が明日滅びるんだから、誰もいなかったけどさ……懐かしかった
よ」
「ずっと顔を覆うようにして鍋の出汁を啜る」

「それで今日は俺、全裸にコートとマフラーだけで来たんだ。工場
の誰か脅かしてやろうと思ってさ。まあ街の方にも誰も居なかった
から、腹立ってコートは脱いじゃったけど……赤提灯が見えたから
さ。虫みたいに、暖かい赤色に惹きつけられて……でも、マスター
驚いてもくんないからなあ」

男は戯けた様に落胆してみせた
実は、ここには仕事してた時に何回か来たことがあったんだけどね。

と付け加える

「……………」
店主はただ黙って『客』の話を聴いていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5404z/>

明日なき世界

2011年12月19日23時53分発行